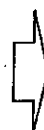


学校規模が小さいことによる課題例

学年単級で一部複式学級がある小学校（例）

学級数	5（内、複式1）	
児童数	1～4年	各 10人
	5・6年（複式）	8人
	全 校	48人



【配置される教員】

校長、教頭、担任5人

【課題例】

○学習面

- ・専科教員が配置されないため、音楽等の教科で専門性が高い指導を受けられず、担任がそれぞれ指導することから学校で統一した指導を実施しにくい。
- ・集団の中で、多様な考えに触れる機会や互いの意見に学ぶ機会等が少なくなりやすい。
- ・複式学級では、たとえば算数の別々の学年の内容を同じ教室で学習するため、指導の工夫が必要になる。

○生活面

- ・一人の役割が大きくなり個別の活動機会を設定しやすい一方、負担が大きくなる。
- ・クラス替えが困難なことなどから、人間関係や相互の評価等が固定しやすい。
- ・学級内の男女のバランスに極端な偏りが生じる可能性がある。

学年単級の中学校（例）

学級数	3	
生徒数	1～3年	各 15人
	全 校	45人



【配置される教員】

校長、教頭、担任3人、専科4人

【課題例】

○学習面

- ・すべての教科（10教科）の専任の教員をそろえられない。
- ・保健体育の球技ではベースボール型のソフトボールの学習は履修すべき内容であるが、人数に合わせてルールを変更する必要があるなど、学習に制約が生じる。

○生活面

- ・小学校の例と同様。

○部活動

- ・運動部 27人、文化部 10人* 程度と想定されることから、部活動は運動部と文化部を1つずつ開設できるのみとなり、生徒の興味や関心に応じた選択肢を用意できない。

* 県全体の部活加入率から推計した人数